側面をもっていた点にあるとしている。この視点は、こんにちの医療福祉と社会福祉にもつながりうるものである。この町会所の研究は、著者自身の博士論文として別に大著がものされている。このような点と同時に、第六章で述べられている養生所の医師たちの診療水準のばらつき、薬種料の少なさによる投薬忌避、与力・同心の職務不熱心などによる養生所の衰退は、読んでいて痛々しい思いすら感じさせられた。ついに養生所がその命脈を絶たれる契機が隣接地での鉄砲射撃訓練の開始であったことも意外な点であった。

全体として、明快な書きぶりであり、要所で必要な実証を加えており、その記述には教養書の水準を超える分析が施されている。ただし、プロローグとエピローグで江戸の養生文化と養生所の深い関連を論じているが、庶民の養生の思想および文化と庶民の受療実態とは相関性はあるものの同系統の事象として整理し難い面もあるので、その点についてはいま少し詳しい注記を望みたい。とはいえ、これは著者の卒業論文がもとになっているという。梅檀の香りを感じさせる秀作をみた思いがする。

（瀧澤　利行）

〔PHP研究所二〇〇五年一月、七二〇円〕

カイプル編、　酒井　シヅ　監訳

『疾患別医学史』Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ

原著はK.F.Kiple編のThe Cambridge Historical Dictionary of Disease（Cambridge University Press 2003）であるが、その原典はThe Cambridge World History of Human Disease（1993）の第八章にあたる。それに三項目を加えて辞書形式としたものである。原典執筆は米国九二名、英国一四名、カナダ五名、スイス二名、フランス二名、スペイン一名、ペルー一名一一七名が担当。一五〇種の疾病について特徴と歴史をまとめたもの。酒井シヅ（順天堂大）大西由希子（朝日生命成人病研究所）・梶谷真司（帝京大文学部）・香西豊子（日本学術振興会）小林武夫（帝京大市原病院）・小林由（昭和大学横浜市北部病院）坂井建雄（順天堂大）・澤井直（順天堂大）・嶋田淳子（群馬大）・松村紀明（東京大学）・柳澤隆昭（東京慈恵会医大）・柳澤波香（青山学院・津田塾大）氏らの十二名で分担翻訳した。

酒井シヅ氏が監訳し、三分冊。全七三五頁の大部の医学史書としてまとめてある。

医科・保健科・文科のエキスパートのスタッフであるが、綜合的な翻訳作業は大変なことであったろうと推察される。

原編者の序文によると「全体のヴォリュームをよりコンパクトにするために、元の本にあった膨大な文献と図版を割愛した」とある。

これは医史学研究者にとっては甚だ残念なことであるが、原典がそうなので止むをえない。

しかし、監訳者代表がその序に「医学・生命科学、福祉保健・医療技術をはじめとする医療業務従事者、衛生・介護・福祉分野の方々、厚生行政に関わる方々など、幅広く多様な方々に読みやすいもので、知的好奇心を満たす」ことを目的とし、手に取り易く訳編されたものであるが、その目的は達せられている。

読み易くするために、原著の欧文人名索引と欧文疾患・症状・事項の索引だけではなく、日本語の精密な疾患などの事項索引を各巻にアイウエオ順に配するという心くばりは良い処置だった。本書の原名通り「疾病辞典」としての役割を十分に果している。それは各巻に収録されている疾患が辞書のようにアルファベット順には配列されず、日本のアイウエオ順に配列されており、原典とは編集が異なっているからでもある。日本人には見易い配列。

第一冊は悪性腫瘍から後天性免疫不全症候群（エイズ）まで四七疾患。（三九）くる病と骨軟化症では来日英人医Theobald A. Palm（一八四八―一九二八）の etiology of rickets（一八八八）及び geographical distribution & aetiology of rickets（一八九〇）の論文も引用して記述されているのは執筆者の質の良さの証拠である。

第二冊では紅斑性狼瘡からトキソプラズマ病まで五三疾患。ツツガムシ病の記載は原典そのものが粗や粗の記述のように思われる。

第三冊では突然死症候群からロッキー山斑点熱と関連疾患までの五八項目という構成になっている。聞きなれぬ疾患も可成りある。

訳語についてみると（一三六）の Paget（骨）病を「ページェット」と舶来の読みにしてあるが「パジェット」というのが最新の医学事典では母国の英語発音が採用されているはず。従ってこの項目配列順序が若干異なることとなる。

収載項目の中では「アテネの疾病」「カタル」「黒死病」「聖 Anthony の火」「チフスマラリア熱」「発汗熱」「ピンタ」「癘癧」などという古典的な疾病名を取りあげられているのは原編集者の医史学的なきめ細かな配慮によるものであるが、面白く読める解説が多い。

これらの疾病項目の中で「破傷風」で北里柴三郎。「野兎病」の大原八郎。「黄熱」と「Carrion 病（オロヤ熱）」では野口英世。「脚気」では高木兼寛。「細菌性赤痢」では志賀潔。と日本人研究者の名が出てくるので、先人の業績の大きさに今更のごとくその努力に敬意を表しながら目をこらして読みつづけられる。

しかし、注意して読んでいくと原典の分担執筆者の記述が誤っているのも若干見えてくる。

例えば（六三）住血吸虫症の三一〇頁に Keinosuke Miyairi は訳語として、翻訳担当者は「宮入慶之助」（一八六五―一九四六）とすべきであるし、その共同研究者 Masatsuga Suzuki

は、宮入の共同研究者「鈴木稔」を同じ九大出身の工学者鈴木雅次（一八八九―一九八七）と誤っている。これは原典の分担執筆者の John Farley の調査不足による誤りである。

また（九三）ツツガムシ病の項の「一八一〇年に、Hakuju Hashimoto は信濃川…」と日本人名を住血吸虫症の項と同じようにローマ字のまゝにしてある。これは有名な『断毒論』『国字断毒論』の著者である「橋本伯壽」と日本語で翻字表記すべきである。翻訳にあたっては日本人名は日本語で統一することが改訂再版の機会には必要である。

また同じようなことは中国人名について言える。本書の第一冊（三九）くる病と骨軟化症の一九九頁にある「中国小兒科学の父 Chien-i…」は一〇七〇年頃に『小兒薬方直訣（鉄氏小兒直訣）』を著した宋時代の小兒科医錢乙（Chin-i）であるから「錢乙」と漢字表現とすべきである。同時に人名索引にも集録しておいてもらうと読者には便利である。王吉民（Chimin Wong）、伍連徒（Wu Lien-Teh）の History of Chinese Medicine（一九三六）は翻訳にあたっては最近出版の中国医学史書よりも医学業績、人名チェックには大変参考となったはづである。

第三冊末尾の（一六〇）Rocky Mountain Spotted Fever を「ロッキー山斑点熱」と直訳してあるが、最新の医学用語辞典では「ロッキー山紅斑熱」が正式な訳語となっている。beutonneuse fever は「斑点熱病」でなく「ボタン熱」、地中海斑点熱は「地中海熱」の訳語になっている。Osteoarthritis は日本では「変形性関節症」と正式に決っている。

学術用語の直訳による瑕瑾があるにしても、各項目の訳文は流麗でよくこなれたものとなっており大変読み易い。

三分冊となっている辞典形式なので、どの分冊のどの項から読みはじめてもよいので気軽に手に取ることができるのがよい。

市販の医学事典でもの足りないところを十分満足させ、疾患について日常の即戦力になる豊かな知識を与えてくれるのは有難い。

（蒲原　宏）

〔A五判・第一、二、三冊各五四〇〇円、東京、朝倉書店二〇〇六年一月刊〕